



つい最近のこと

“フィリピン人の
女”

江田島健児

フィリピン人の女

「寄付をお願いします」

「子供達を助けてください」

突然直進してきた東洋人の二〇才前後の女性がボクの傍らで立ち止まった。

ここはアメリカ、テキサス州アービング市のベルト・レーン沿いに建つ、チャイニーズ・スーパー・マーケット内である。三〇センチも離れていないボクの横に立つ若い東洋人の女性は、

「あなたは何人ですか。中国人、韓国人、ベトナム人、フィリピン人……」

と、ボクに向かってアジアの国籍を並べたてる。全然的外れの国籍にぶっきらぼうに、

「私は日本人だ」

と答えた。すると、質問していた時の真顔をにこにこしたスマイルに変え、突如彼女の左手がボクの右手に伸びボクの右手を摩りだす。そして

「お願いします。この空腹なフィリピン人の子供達を救うために、寄付をお願いします」

痩せた空腹の子供達が屈託なく笑って写っているパンフレットを右手でボクに見せつつ、

「私はフィリピン人です。この子供達を助けるために寄付を集めています……」

つい最近、フィリピン南部のミンダナオ島を襲った台風二十一号による死者六百三十四人、三十四万人が避難のニュースを思い浮かべ、寄付を決意する。

しかし、ボクの右腕から今度は背中をにこにこしながらなでなでする彼女の仕草さが気にいらぬ。ひょっとしてこの女性はある宗教集団の手先で、教会の為に金を集めているのではないか、純粋に子供達の為の寄付を募るボランティアにしては少し行動がおかしい。

それどころかボクが日本人と答えると同時に、ボクの体に手を伸ばしてきた女性に嫌な連想が起きた。この女性は、日本人男性はこの手でころりと落とせる、それを経験と肌身で知っているような変わり身に、ボクはからかわれているような馬鹿にされているような気もした。

三〇年も昔、日本が高度経済成長を成し遂げようとしている頃。

日本人男性は企業戦士として凄まじい活躍を世界に見せつけ、仕事の報酬として受け取った金で世界の女性をも買い漁り、その代償として“エコノミック・アニマル”と言う嬉しくもないレッテルを、世界は日本人男性に贈ったのである。そしてボクは、日本人男性は、今でも世界中の女性からそんな目で見られているのではないか、そんな気がした。ましてアメリカでは、見知らぬ者同士が初対面で体に触れ合うなどまずあり得ないことだ。それが相手が異性となれば警戒心があって当たり前なのである。

一九八〇年前後にアメリカのビザを延長する方策としてカリフォルニアにいる日本人旅行者は、サンディエゴの南に位置する国境の街、メキシコのティファナを一時的に訪問した。またボクもアメリカの観光ビザを延長するために一度だけティファナを訪れたことがある。ティファナの露天商を集めたみみたいな商店街へ行くと、道行く日本人らしき人間を見つけた店員が、

「はい！。鈴木さん」

「はい！。田中さん」

「高橋さん。山田さん……」

日本語で呼びかけてきた。自分の名前でもなくても日本語なので振り向くと、そこにはにこにことした店員

が、

「これ安いよ」

「これ十ドルでオーケーよ」

間髪を容れず日本語で語りかけてきた。これも“日本人は金離れがいい”こんな通念が世界中を駆け回っていた。

農協がのぼりを先頭に世界の街をぞろぞろと歩く。この頃は世界の“ノウキョウ”とも呼ばれていた。一九八〇年だったか八十一年だったか、アメリカで“SHOGUN”がテレビ放映された時、アメリカで一番人気のある深夜ホスト・ショウのJ・C・ショウでJが

「今日はトヨタの車で家に帰り、ソニーのテレビで寿司（寿司だったか記憶が定かでない）を食べながら、“SHOGUN”を見る」

ジョークを飛ばすと、聴衆は爆笑していた。このホスト・ショウの王様は日本人・ビジネスマンを

「背を丸め、グレーか紺のスーツに身を包み眼鏡をかけ、首にはカメラをぶら下げて鼠・ルックだ」

と、日本人男性にはきつい冗談も放っていた。

特に世界では、日本人男性には良くない評判が飛び交っている。

そして今では、貧しいアジアの国々から金を稼ぐために日本へ働きに来るアジア人が多くいる。彼等は経済的には貧しいけど、金を稼ぐために日本と日本人の特性を研究し、いくらかの日本語を話す。彼等は生活のため家族のために必死にそれをやる。あくまでも商売として金を稼ぐために。彼ら彼女らの商売的献身さをその人の性格や人間性と勘違いした日本人は、すけべ心と日本女性にはない甘美さを恋や愛と勘違いすることが多い。馬鹿な日本人は金も愛も簡単に貢いでしまう。又これも彼ら彼女たちは計算済みである。

突然話しかけてきて人の体に手を出すなど、寄付を語る商売に思えて不快感さえ感じた。若い女性は知ってる限りの日本語を喋るが、ボクは敢て英語で、“Are you a Filipino?.”彼女の“Yes, I am a Filipino.”を確認すると、“I don't like you touch me, please take your hand off from me.”今までにこにこしながら、すり寄るようにしていとも簡単にボクの体に手を出していた女性の顔はさっと青くなり、“I am sorry.”と、急に畏まった。

この得体の知れない女性に、最初十ドルはと思った金額を一ドル札二枚だけにして手渡した。どう言う訳か、アメリカのこの辺りで寄付を募って近寄ってくるのは東洋人の若い女性がほとんどである。寄付のボランティアなら男性でもいいし年齢も関係ないと思うが、不思議と国は違っても東洋人の女性なのである。